

露 МОНГОЛЬСКИЕ ЯЗЫКИ, 中 蒙古語族(Měnggǔyǔzú)

モンゴル諸語は、中央アジアのモンゴル高原を中心に広く分布する、モンゴル系の諸族によって行なわれる諸言語、諸方言の総称である。

現在、モンゴル系の民族としては、モンゴル人民共和国や中国内のモンゴル族をはじめ、ソ連邦内の、カルムイク(Kalmuck)族、ブリヤート(Buriat)族、中国内の、ダグル(Dagur)族、ユグル(Yögur)族、モンゴオル(Monguor)族、バオアン(Baoan)族、ドゥンシャン(Dungshang)族、アフガニスタンのモゴール(Moghol)族などが数えられ、モンゴル諸語の話者の総数は、500万人から600万人と推定される。

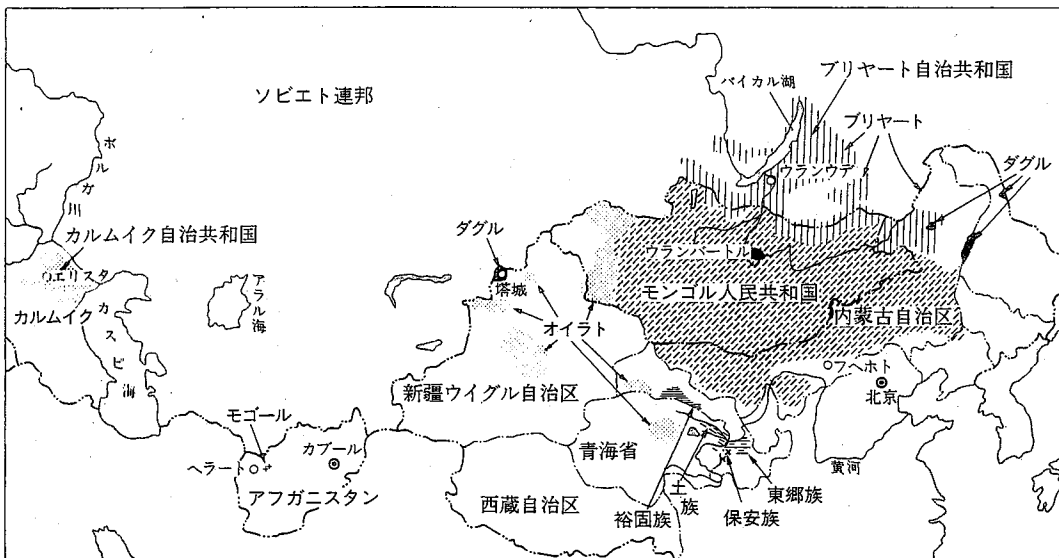
これらの言語の間には、文法の基本的な枠組みと基礎語彙の大部分において、意味と音韻の緊密な対応関係が認められることから、それらが、互いに系統的な親縁関係を有することは疑いない。つまり、これらの言語は、同一の祖語に由来する「モンゴル語族」を構成する。

**[主な分布地域]** モンゴル諸語に属する主な言語には、次のものがある(図1を参照)。

- 1) ソ連邦のカルムイク自治共和国(Калмыцкая АССР)を中心に行なわれるカルムイク語。話者数、約12万人。書きことばは、ロシア字に、ə, h, ж, н, ɵ, ү の6文字を加えた、39の字母で表記する。
- 2) 中国の、新疆ウイグル自治区、青海省、および、モンゴル人民共和国の、ホブド(Khovd)、オブス(Uvs)両アイマクを中心に居住する、オイラト系モンゴル族の使用するオイラト語。話者数は、中

モンゴル諸語 英 Mongolian languages,

〈図1〉 モンゴル系諸言語(諸民族)主要分布図



国内10数万人、モンゴル国内10万人前後、合計20数万人と推定される。

前述のカルムイク族も、元来、オイラト系モンゴル族であり、両者の口語の差異は、僅少である。このため、カルムイク語をも含めて、「オイラト語」とよぶことがある。モンゴル国内と中国内のオイラト語は、それぞれの国内のモンゴル語の方言として扱われている。なお、新疆ウイグル自治区のオイラト系モンゴル族の間では、17世紀にモンゴル文字を改良してつくられた「トド(todo)文字」で表記するオイラト文語が、書きことばとして用いられている。

- 3) モンゴル人民共和国、および、中国の内モンゴル自治区を中心に行なわれているモンゴル語。話者数は、モンゴル内で約180万人、中国内で約300万人。モンゴル人民共和国では、伝統的なモンゴル文語に代わって、1940年代に、ロシア字に *o*, *y* の2文字を加えた、35文字で表記する書きことばを採用し、中国内のモンゴル族は、現在も、伝統的な縦書きのモンゴル文語(後述)を、書きことばとして使用している。

このように、書きことばが異なり、さらに、標準語音も、モンゴルではハルハ(Khalkha)方言に基づき、中国ではチャハル(Chakhar)方言に基づいていることから、本辞典では、モンゴル人民共和国の言語を「モンゴル語」(または「ハルハ・モンゴル語」)、中国内モンゴル自治区の言語を「内蒙古語」(または「内モンゴル語」として区別する。

- 4) ソ連邦の、ブリヤート自治共和国(Бурятская АССР)、イルクーツク州(Иркутская область)アガ・ブリヤート自治管区(Агинский Бурятский авт.окр.)、チタ州(Читинская область)ウスチ・オルダ・ブリヤート自治管区(Усть-Ордынский Бурятский авт.окр.)等に分布するブリヤート語。使用者数は、約30万人。書きことばは、ロシア字に *o*, *y*, *h* の3文字を加えた、36文字で表記する。

- 5) 中国内モンゴル自治区の呼倫貝爾盟莫力達瓦達斡爾族自治旗、および、新疆ウイグル自治区のチョチュク(塔城)県を中心に分布するダグル(達斡爾)語。話者数は、約8万人。独自の書きことばをもたないが、近年、ローマ字アルファベット26文字で表記する書きことばを創作し、普及する試みが進められている。

- 6) 中国甘粛省の肅南裕固族自治県の東部に分布するシラ・ユグル(東部裕固)語。話者数は、3千~4千人。独自の書きことばをもたない。

- 7) 中国青海省の、互助土族自治県、および、民和

回族自治県を中心分布するモンゴオル(土族)語。話者数は、10数万人。1979年から、ローマ字アルファベット26文字を用いて、中国語の拼音方式で表記する書きことばを使用している。

- 8) 中国の、甘粛省臨夏回族自治区の積石山保安族東郷族撒拉族自治県、および、青海省同仁県に分布するバオアン(保安)語。話者数は、総計1万人前後。独自の書きことばをもたない。

- 9) 中国甘粛省臨夏回族自治区の東郷族自治県を中心分布するドゥンシャン(東郷)語。別名、サンタ語(Santa)。話者数は、20数万人。独自の書きことばをもたない。

- 10) アフガニスタンのヘラート(Herāt)州に点在する、モゴール族によって話されるモゴール語。話者数は、推定で、数百人。独自の書きことばをもたない。

以上の各言語は、それぞれ、いくつかの方言、また、さらにその下位方言を含む。特に、ブリヤート語と内蒙古語は、内部の方言的差異が多様である(それぞれの言語の方言、下位方言については、当該の言語の項を参照されたい)。

【分類】 現代のモンゴル系の諸言語、諸方言の分類に関しては、古くは、ルードニェフ(A. Руднев, 1908)や、ウラディーミルツォフ(Б. Я. Владимирцов, 1929)のものがあり、第2次大戦後は、ポッペ(N. Poppe 1955, 1965)、ロブサンワンダン(Ш. Лувсанвандан, 1959)、デルファー(G. Doerfer, 1964)、ヴァイアース(M. Weiers, 1986)などの試みがある。諸言語、諸方言の分類は、純粋に言語学的な見地から、それら相互間の歴史的な系譜関係を見きわめて行なうことが望ましいが、研究の現状からみて、実際は、きわめて困難である。

これには、モンゴル系諸言語の実態が、最近まで明らかでなかったという理由がある。シラ・ユグル語、バオアン語、ドゥンシャン語などの言語は、今世紀も半ばを過ぎるまで、その概要すら明らかでなかった上、まとまった分量の信頼できる記述資料が利用できるようになったのは、ようやく1980年代になってからのことである。ダグル語やモゴール語にしても、事情は、さほど変わらない。要するに、モンゴル系の諸言語の本格的な比較研究は、端緒についたばかりであると言っても過言でない。

ここでは、言語的な差異と地域的な位置関係を考慮して、全体を、次のようなまとまりとして捉えておく。IからVまでは、ロブサンワンダン(1959)が広義の「モンゴル語」とよんでいるものであるが、その分類では、以下の南方群と中央群が1つにまとめられている。

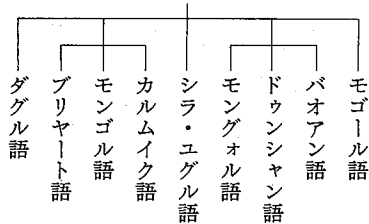
- I) 西方群(カルムイク語、オイラト語)

- II) 北方群(ブリヤート語)
- III) 東方群 (内蒙古語のハラチン Kharachin 方言, ホルチン Khorochin 方言)
- IV) 中央群(ハルハ・モンゴル語)
- V) 南方群 (内蒙古語のチャハル方言, オルドス Ordos 方言)
- VI) 孤立的諸言語
  - 1) ダグル(達斡爾)語
  - 2) シラ・ユグル(東部裕固)語
  - 3) モンゴォル(土族)語
  - 4) バオアン(保安)語
  - 5) ドゥンジャン(東郷)語
  - 6) モゴール語

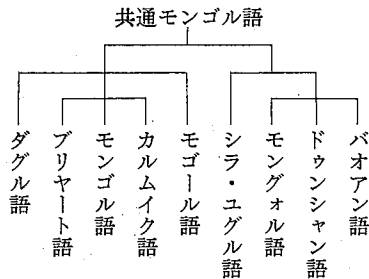
孤立的言語は、他のいずれの言語、方言ともかけ離れた言語的特徴を有すると見なされる言語であるが、モンゴォル、バオアン、ドゥンジャンの3言語(あるいは、そのうちの2言語)が、今後の研究によって、1つの語派にまとめられる可能性は大きいと思われる。

モンゴル諸語の系統的分類に関しては、内蒙古大学中国語文学系蒙古語教研室(1964)や、噶世長(1983)の意見があり、傾聴に値するが、これらに基づいて、今後の論議が期待される(図2を参照)。

〈図2〉 モンゴル系諸言語の分類



出典：『現代蒙古語』(1964)による。



出典：噶世長(1983)による。

【文字資料】 中国の正史である『元史』によれば、1204年に、チンギス汗(Činggis qayan)がナイマン部を滅ぼした際に、ウイグル人宰相タトング(塔塔統阿)を捕え、彼をして、自らの太子諸王にウイグル文字を学ばせたのが、モンゴル族が文字を用いて自らのことばを記録するようになった始めであるという。

これより先、遼王朝(916~1125)を立てた契丹族の

言語が、モンゴル系ではないかとの疑いがもたれているが、契丹語自体の解明がまだ十分でなく、モンゴル語との関係は、いくつかの単語の比較にとどまっている。

契丹語の資料としては、1)『遼史』『契丹国史]などの漢文史書中に、漢字によって表記された契丹語の単語、および、2)契丹文字資料(主に、「哀冊」とよばれる遼代の墓碑銘)、の2種類がある。漢字によって表記された契丹語の語彙の中には、明らかにモンゴル語に関係すると思われるものがあることが指摘されているが、漢字の表記は、個々の音を忠実に写したものでないことから、契丹語のもとの音形の推定に、厳密さが期しがたいのが難点である。

漢字表記の契丹語	モンゴル文語形
陶里, 洵里(tauli)	「兔」 taulai 「兔」
討(tau)	「5」 tabu(n) 「5」
捏褐(nie'xə')	「犬」 noqai 「犬」
虎思, 骨斯(xusi, gusi)	「有力」 küčü(n) 「力」

一方、契丹文字については、上述のように、いまだ完全な解読には至っていないが、特筆に値するのは、1970年代以降、解読に長足の進歩が遂げられたことである。つまり、中国の清格爾泰らをはじめとする研究グループは、漢文の人名、官位、称号などに対応する契丹文字の表記をもとに、契丹小字の表音的性格と、それらを組み合わせて音節を構成する原理を解明し、これによって、契丹小字全377字のうち、100字以上の音価を確定した。しかし、残る文字については、いまだ解読が及ばず、契丹語の言語的な特徴や、モンゴル語との関係の解明は、今後の重要な課題として残されたままである。

契丹語の資料をしばらくおくと、過去のモンゴル語の資料で、現在、われわれが遡ることができるのは、ウイグル文字で書かれた13世紀前半のものまでであり、この点では、上記、『元史』の述べるところと合致する。

ウイグル文字で綴るモンゴル語は、「モンゴル文語」(あるいは「書写モンゴル語」)とよばれる。モンゴル文語は、オイラト族の間では、17世紀の中葉にオイラト文語(後述)にとって代わられるまで、また、東部ブリヤート族の間では、1930年にラテン字アルファベットが採用されるまで、そして、モンゴル人民共和国では、1946年にロシア字に基づいた「新文字」に移行するまで用いられてきた。一方、中国のモンゴル族の間では、モンゴル文語が、現在も使用されている。

このように、モンゴル文語は、13世紀以来今日に至るまで、モンゴル族の書きことばとして用いられてきたが、16世紀末から17世紀初めを境に、大きな変化を被った。

これは、同時代におけるチベット仏教(ラマ教)の受容と関係が深い。16世紀後半から、チベット語を介して、大量の仏典がモンゴル語に翻訳され、あるいは、古い翻訳が改訳されて、多数のモンゴル語の写本や木版の経典がつくられたが、その際、モンゴル文語の字形や綴りが統一され、文章語として規範化が進められた。この時代以降の、主として、仏典に用いられる規範化された言語を、「古典期」(classical)モンゴル文語とよび、これに対して、それ以前のものを、「前古典期」または「先古典期」(preclassical)モンゴル文語とよんで区別している。

「前古典期」モンゴル文語の字形は、ウイグル文字とほとんど同じであるが、「古典期」では、字形が丸みを帯び、モンゴル文語独自の書体となった(両者を区別するために、前者を「ウイグル式モンゴル文字」、後者を、単に、「モンゴル文字」とよぶことがある)。字形や正書法のほかにも、前古典期モンゴル文語には、文法的接尾辞や語法で、「中世モンゴル語」(後述)に類似した古風な特徴が見られ、語彙では、ウイグル語などチュルク系からの借用語彙が目立つ。これに対して、古典期モンゴル文語では、チベット語からの借用語が多いのが特徴的である。

前古典期モンゴル文語の主な文献資料としては、チンギス汗の甥、イエスング(Yesüngge)の強弓をたたえて花崗岩板に刻された、5行約20語の「チンギス汗碑文(Činggis-ün čilaγ-un-u bičig)」(1224年または1225年、モンゴル文語によって書かれた、現存の最古の資料)をはじめ、「濟源十方大紫微宮聖旨碑」(1240)、「ムンケ汗碑文(Möngke qaγan-u kösiyen-ü bičig)」(1257)等の碑文、グェク(Güyük)汗からローマ法王イノセント(Innocent)4世にあてた書簡(ペルシア語)に押された印璽(1246)、イル汗(Ilkhan)国王からローマ法王やフランス国王らにあてた複数の書簡(1289, 1290, 1302, 1305)や、ローマ教皇庁の使節に与えた通行証(1267または1279)、駅通通行牌子イェズの銘、14世紀前半に属すると推定される、トゥルフアン(Turfan)出土の、一連の仏典、法令、書簡、物語などの断簡類(中でも、『入菩提行論(Bodhičariya avatara)』、同注釈)をはじめとする、チョイジ・オドセル(Čhos-kyi 'Od-zer)の翻訳や著述、『アレクサンダー物語(Sulqarnai-yin turuži)』などが有名)、14世紀中葉に属する、主として漢蒙対訳の碑文(1335, 1338, 1340, 1346, 1362)、漢蒙対訳の『孝経(Takimdaγu nom)』、14世紀に遡る翻訳と推定される『スバシド(Sayin üge-tü erdeni-yin sang)』、『パンチャラクシャ(Tabun sakiyan)』、『普曜経(Arban qoyar jokiyangγui)』、『金剛般若経(Altan gerel)』等の仏典がある。

15世紀、および、16世紀前半に属するモンゴル語の

文献資料は、その前後の期間と比較して、質的にも量的にも乏しい。

16世紀後半以降は、チベット仏教の受容とともに、チベット大蔵経(カンジュール Kanjur, タンジュール Tanjur)をはじめ、大量の仏典が翻訳され、これと並行して、チベット語の学習書、翻訳手引書、翻訳用語集などが編纂され、モンゴル語の文法学書も著された。モンゴル文語で、チベット語やサンスクリット語の音を過不足なく写すために、学僧アヨシ・ゲーシ(Ayusi güüsi)によって、モンゴル文字を変形した「アリガリ(Ali γali)」とよばれる文字が作製されたのも、この時期のことである(1587年)。このほか、『パンチャタントラ(Tabun šastir)』など、インド、チベット起源の仏教説話集、暦法書、古い書など、蔵外仏典の翻訳や著述も多い。

仏典以外にも、17世紀以降のモンゴル文語資料は豊富である。『アルタン・ハーン伝(Altan qaγan-u turuži)』(17世紀初)、『エルデニン・トブチ(Erdeniyin tobči, 蒙古源流)』(1662)、ロブサン・ダンザン(bLo-bzañ bsTan-'jin)の『アルタン・トブチ(Altan tobči, 黄金史)』(17世紀中頃)、『シラ・トージ(Sira turuži, 黄史)』(17世紀後半)、無名氏撰の『アルタン・トブチ(Qad-un ündüsün quriyangγui altan tobči)』をはじめ、多くの年代記や史書が編纂され、各種のチンギス汗伝説や、『ゲセル汗物語(Geser qaγan-u turuži)』(1716, 木版本)などの伝承文芸が記録され、特に、内蒙古地域では、中国の史書や大衆小説の翻訳も盛んに行なわれた。

20世紀には、ロシア語をはじめ、ヨーロッパ諸語から、政治、文化、文学など、各種ジャンルの翻訳が行なわれ、こうした分野での著述活動も、活発に行なわれた。

このように、モンゴル文語は、モンゴル族が、もっとも長期間、もっとも広範囲に使用した書きことばであるが、モンゴル族が自らの言語を記録するために採用した文字と書きことばは、これにとどまらない。

1269年、モンゴル帝国の第5代皇帝フビライ汗は、チベット人僧侶パスバ(Phags-pa)に命じて、「蒙古新字」を作製させ、詔勅をもって、これを公布した。その文字は、チベット文字を正形状に變形して、縦書きに綴るもので(行は、モンゴル文語と同様、左から右に進む)、「パスバ文字」(チベット語読みで「パクバ文字」)、または、「方形文字」とよばれる。パスバ文字は、元朝年間には、「国字」としてその使用が奨励されたが、音節ごとの分かち書きなど、書写、読解に不便なため、モンゴル文語にとって代わることができず、元朝の滅亡(1368)とともに滅びた。

パスバ文字で書かれたモンゴル語の文献としては、

仏教や道教の寺社に税を免ずる詔勅を記した書状やそれを刻した碑文(20数件)、ほかに、居庸関の仏塔の造塔功德記(1343)、駅通通行牌子(4件)、『スバシド』のモンゴル語訳版断片(3葉)、印章などがある。パスバ文字文献は、13~14世紀のモンゴル語の口語資料として、質的に、きわめて貴重であるが、量的には、文献の点数も種類も少ない。

1648年には、オイラト族のザヤ・パンディタ(Za-ya Paṅḍita)が、モンゴル文字を改良して、「トド文字」を作製した。これは、モンゴル文語を表記するウイグル文字の字母を変形したり、それに識別符号を付けたたり、また、長音符号を加えるなどして、モンゴル文語に存在していた、多音字(polyphone)による読み方のあいまいさをなくし、トド(todo「明瞭な」の意味)文字とよばれた。これは、主に、オイラト族の間で用いられ、この文字で綴られる文章語を、「オイラト文語」とよんでいる。オイラト文語は、ソ連邦内のカルムイクでは、1924年にロシア字に基づく新しい書きことばが採用されるまで用いられ、中国新疆ウイグル自治区のオイラト族の間では、現在も使用されている。

オイラト文語で書かれた資料としては、各種仏典の翻訳のほか、歴史書、口叙叙事詩の写本などが伝えられている。

オイラト文語は、必ずしも、当時のオイラトの口語を忠実に写したものでなく、そこには、モンゴル文語の伝統を踏襲した、人工的な綴りや形態も認められる。

1686年に、ハルハのザナバザル(ĴanabaĴar)によって、サンスクリット系のランチャ(Lan-t'sa)文字をもとに、「ソヨンボ(Soyangbu)文字」が作製された。これは、モンゴル語、チベット語、サンスクリット語の音を写しやすくしたもので、当時の口語音を知るには貴重な資料となりうるが、広く普及せず、これで記録された現存の文献はわずかである。

今世紀の初頭の1905年、ブリヤート人の僧侶アグワン・ドルジェフ(Агван Доржиев)は、モンゴル文字をトド文字風に改良して、ブリヤート新文字を作製して、バイカル湖西部のブリヤート族を教化することを試みた。この文字は、製作者のサンスクリット名をとって、「ワギンダラー(Vagindra)文字」とよばれるが、やはり普及するに至らなかった。

今世紀の20年代の後半からソ連邦で高揚した、ラテン字化運動の中で、ブリヤートとカルムイクでは、1930年代初めに、ラテン字(ローマ字)で表記する書きことばを採用し、30年代の後半に、運動がロシア字化の方向に転換すると、ロシア字に基づく正書法へと移行した。これに影響を受けて、モンゴル人民共和国でも、1946年に、モンゴル文語に代わって、ロシア字に基づく書きことばが採用され、今日に至っている。

このほか、モンゴル族自らが、また、モンゴル族と接触した他の民族が、漢字、アラビア文字、チベット文字、満州文字、ハングル、ローマ字、ロシア字などの文字で、さまざまな時代にさまざまな地域で記録したモンゴル語の資料が、今日に伝えられている。

漢字で表記されたモンゴル語資料としては、13世紀中葉に著され、14世紀後半に漢字音訳されたと推定される、「モンゴルの秘めたる歴史」すなわち『元朝秘史』の漢字音訳本、さらに、『至元訳語』(13世紀後半)、『華夷訳語』(1389年序のものをはじめ、3種ある)、『北虜訳語』(1599年刊の『登壇必究』所収)、『盧龍塞略』(1610)、『薊門防禦考』(1621年刊の『武備志』所収)などの漢蒙対訳語彙集がある。後世の漢蒙対訳語彙集には、先行する『華夷訳語』などの記載を、そのまま踏襲している部分があり、ただちに同時代の口語資料と見なすことには、警戒を要する。

アラビア文字表記のモンゴル語資料としては、イスラム圏の学者によって記録された『ムカディマット・アル・アダブ(Muqaddimat al-Adab)』『イブン・ムハンナー(Ibn al-Muḥannā)の語彙』『ライデン(Leiden)語彙』など、アラビア語などとの対訳語彙集が、13~14世紀に属する西部の口語方言の資料として重要である。

満州文字表記のモンゴル語資料としては、『御製滿珠蒙古漢字三合切音清文鑑』(1780年の序)や、『三合便覽』(1780年の序)など、満州文字によって表音が示されている対訳辞書(前者には、漢字による表音も付されている)の類や、『滿蒙合璧清文鑑』(第2次、1743)、『三合語録』(1829)など、満州文字でモンゴル語を表記したものがある。

ハングルで表記されたモンゴル語資料としては、李朝時代の司訳院の翻訳官のモンゴル語学習書として編纂された、『捷解蒙語』『蒙語類解』『蒙語老乞大』の、いわゆる「蒙学三書」が代表的な資料である。

【語史】モンゴル語の歴史は、前節で見たように、13世紀前半以降の文献資料によってたどることができる。

13世紀初めに、モンゴル族によって採用されたモンゴル文語には、他の資料にはみられない独自の特徴が見いだされるため、これに反映されているモンゴル語の発展段階を、「古代モンゴル語」とよぶことがある。モンゴル文語の成立を、13世紀初めよりはるか以前の時代とする意見もあるが、12世紀以前の文献資料の裏づけがないことと、次に述べる「中世モンゴル語」との多くの類似点を考えれば、13世紀初め頃の言語状態を反映していると考えるのが、妥当と思われる。

モンゴル文語の正書法は、中世モンゴル語と、基本的な特徴では合致しているが、主な相違点は、次の2

点である。

1) 中世モンゴル語の母音連続 (hiatus) に対応して、母音間に、子音字  $\gamma$  または  $g$  が書かれる (以下、母音間のアポストロフィーは、長母音、二重母音でないことを表わす)。

モンゴル文語	中世モンゴル語
a $\gamma$ ula 「山」	a'ula
degere 「上」	de'ere

2) 中世モンゴル語の 1 群の単語の語頭にみられる、無声摩擦喉音  $h$  が表記されない。

モンゴル文語	中世モンゴル語
arban 「10」	harban
on 「年」	hon

後者は、ウイグル文字に、 $h$  を表わす文字がなかったという表記上の制約による可能性が大きい。前者の特徴は、現在および過去の、他のいずれの言語状態にもみられない、モンゴル文語独自の古風な特徴と見なされている。

ところで、モンゴル文語を表記するウイグル文字は、字母が少なく、モンゴル語の音を写すのに十分でないため、モンゴル文語自体が、音声面で、確実な証拠となりえない点が少ない。たとえば、母音の  $o$  と  $u$ ;  $\ddot{o}$  と  $\ddot{u}$ ; 子音の  $k$  と  $g$ ;  $t$  と  $d$ ; 語中の  $\ddot{c}$  と  $\ddot{j}$  は、それぞれ同じ字で書き表わされ、また、子音の  $q$  と  $\gamma$  も、書き分けられないことが多い。モンゴル語史研究の伝統では、モンゴル文語のローマ字転写形を、一定の条件つきで、「古代モンゴル語」を表わす音形として用いることがあるが、その際、これらの特徴に関しては、中世モンゴル語や現代モンゴル語諸方言の特徴から音形を推定して、ローマ字に転写している。したがって、そうした場合のモンゴル文語のローマ字転写形、ひいては「古代モンゴル語」形には、多分に、推定された要素が含まれていることを忘れてはならない。

モンゴル族が興隆をきわめた元王朝(1269~1368)の年間を中心にした 13~14 世紀は、モンゴル語史研究にとっても、きわめて重要な時代である。この時代には、モンゴル文語のほかに、漢字、パスパ文字、アラビア文字などによって、当時のモンゴル語の口語が記録されたことにより、質量ともに豊富な文献資料によって、当時のモンゴル語の言語状態を、かなり詳しく知ることができる。

これら 13~14 世紀の文献で実証されるモンゴル語の発展段階を、「中世モンゴル語」(または「中期モンゴル語」)とよんでいる。中世モンゴル語の主要な特徴として、まず、音声面では、次のような点を指摘することができる。

1) 語頭に、無声摩擦喉音  $h$  をもつ 1 群の単語がある。この子音は、現代のモンゴル諸語のうち、ダグル語、モンゴール語、シラ・ユグル語、バオアン語、ダウンシャン語では、 $h$ ,  $x$ ,  $f$  等の無声摩擦子音として保持されているが、それ以外の言語では消失した。

2) 母音連続が存在する。この母音連続は、現代諸方言の多くで、縮合して長母音となった。

モンゴル文語	中世モンゴル語	ハルハ・モンゴル語
ula $\gamma$ an	hula'an	ulā $\gamma$ 「赤い」
to $\gamma$ a	to'a	tō 「数」
emegel	eme'el	emēl 「鞍」
egülen	e'ülen	ūl 「雲」

3) 喉音の  $q$ (tense) と  $\gamma$ (lax) を区別しない(東部方言に特徴的)。

中世モンゴル語	ハルハ・モンゴル語
qar	Gar 「手」
qara	xar 「黒い」
qaqai	Gaxai 「猪」
qaqas	xaGās 「半分」

4) モンゴル文語の第 1 音節の母音  $i$  が、よく保存されている(現代のモンゴル諸語の多くでは、この母音が第 2 音節の母音に同化する「 $i$  の折れ」の現象が、広く認められる)。また、現代諸語にみられる母音の弱化はなく、母音は、すべての位置で安定している。

モンゴル文語	中世モンゴル語	ハルハ・モンゴル語
ima $\gamma$ an	ima'an	jamā 「山羊」
nidün	nidün	nüd 「目」
iru $\gamma$ ar	hiru'ar	zoröl 「底」
siba $\gamma$ un	šiba'un	šübü 「鳥」

次に、主な形態的、統語的特徴としては、以下ののような点をあげることができる。

1) 複数接尾辞  $-t$ ,  $-ut$ / $-üt$ ,  $-s$ ,  $-nar$ / $-ner$ ,  $-(n)u'$  $ut$ / $-(n)ü'$  $üt$ ,  $-n$  が多用される。複数接尾辞は、名詞だけでなく、それを修飾する形容詞や数詞、形動詞にも付き、修飾語と被修飾語の両方が複数接尾辞をとる、「数の一致」の現象がみられる。ただし、数の一致は、首尾一貫しているわけではない。

qoas (<qoa)	sayit (<sayin)	ökit (<ökin)
美しい(pl.)	よい(pl.)	娘たち(pl.)
qoyar tümet (<tümen)	čeriüt (<čerik)	
2 万の(pl.)	軍(pl.)	

ede oroqsat (<oroqsan)	irgen (<irge)
これら 降伏した(pl.)	民(pl.)

複数接尾辞の  $-t$  は、動詞語幹にも付き、複数の主語に対応する現在時制の終止形として用いられる。

yeke	üge	ügüle-t	ta.
------	-----	---------	-----

大きな言葉を話す(ものだ) 汝らは  
「汝らは大言壮語するものだ」

2) 動詞終止形の語尾に、男・女の主語に呼応する特別な形がみられる。

niken kö'ün töreba. (töre-「生まれる」)

1人の息子が生まれた

temülün neretei niken ökin törebi.

テムルン という名の 1人の娘が生まれた

qačiu-yin kö'ün barulatai neretü

カチウの息子は パロラタイ という名で

bülee.

あった

gergei inu... čotan neretei

妻は (←彼の) チョタン という名で

büliyi.

あった

男性の主語と女性的主語に呼応する、このような動詞語尾の使い分けは、しかしながら、ところどころに見いだされるもので、あまねくゆきわたった現象ではない。一般に、中世モンゴル語の一連の動詞終止形語尾には、2種類または3種類の異形態をもつものが多く、それらの使い分けは、すでに区別を失っている部分も多いが、ある程度の傾向をもって、主語の性と数に呼応した使い分けを認めることができる。これらは、モンゴル語の、より早い発展段階に存在していた、性(gender)と数の範疇の残存形態と考えられる。

性と数の範疇としては、さらに、名詞に付いて、「～をもつ」という意味の形容詞をつくる接尾辞で、-tu/-tü (男性単数)、-tai/-tei (女性単数)、-tan/-ten (複数)の3形があり、形動詞予定形の接尾辞で、-qu/-kü (男性単数)、-qui/-küi (女性単数)、-qun/-kün (複数)の3形があって、性、数と呼応している。このほか、数詞の「2」にも、qoyar と並んで、女性形の jirin という形がある。

jirin ökit 「2人の娘(pl.)」

3) 人称代名詞の1人称複数形に、排除形の ba と包括形の bida の2つの系列がある。

また、3人称の人称代名詞として、単数の \*i「彼」、および、複数の \*a「彼ら」のいくつかの斜格形が用いられる。

inu「彼の」、imada「彼に」、imayi「彼を」、

ima'ari「彼をして」; anu「彼らの」、andur「彼らに」、ani「彼らを」

3人称の代名詞としては、このほかに、指示代名詞の ene「これ」、tere「あれ」、ede「これら」、tede「あれら」があわせて用いられる。

4) 人称代名詞の主格形が、しばしば述語の後におかれる。

ja'ura tatar irgen-e oyisulaqda'a

途中で タタールの 民に 謀られた

bi.

我は

qamtu ker alduqun bida.

いっしょに どうして 暮らせようか われわれは

中世モンゴル語の内部には、漢字、パスパ文字で記録された東部方言と、アラビア文字で記録された西部方言の、2つの方言的差異が認められる(上に述べた特徴は、東部方言に基づいている)。西部方言には、改新的な特徴が多く含まれ、名詞の曲用語尾など、現代語に近い形がみられるほか、動詞の活用形に、複数語尾-lar/-lerを用いるなど、チュルク系言語の影響が大きい。

ポッペ(N. Poppe, 1965)は、中世モンゴル語の時代が、15, 16世紀まで続いたとしているが、15, 16世紀に属する資料はきわめて乏しく、文献によってこの時期の言語状態を知ることは困難である。

16世紀後半から17世紀以降には、モンゴル文語をはじめとする書記記録が豊富に残されている(既述)。文語中に露出している口語的な要素などから、現代モンゴル語の基本的な特徴は、この頃まででできあがっていたと推定され、これ以降の発展段階を、「近代モンゴル語」とよんでいる。しかし、この時代にも、口語資料は少なく、詳しい言語状態を知ることはできない。個々のモンゴル系言語の史的变化の過程や、諸言語間の分岐発展の関係の解明は、モンゴル語の史的・比較研究の今後の課題として残されている。

[系 統] モンゴル語族が、他のいずれの言語と親縁関係にあるかという問題は、いまだ解決されていないが、系統的に、これともっとも近い関係にあると考えられているのは、チュルク語族と満州・ツングース語族である。これら3つの語族が、同一の祖語に由来し、系統的な親縁関係にあるとする「アルタイ学説」は、専門家以外にも一般に広く知られているが、その妥当性については、研究者の間で、依然、賛否両論が続いている(アルタイ学説の概要と問題点については、「アルタイ諸言語」の項を参照)。

確かに、上記3語族の間には、緊密な歴史的な関係をうかがわせる類似点が少なくない。それらの類似点の中で、最初に目をひくのは、母音調和の存在や、語幹に接尾辞が次々に付着して語が構成される膠着的特徴、さらに、接尾辞の付着順序や語順の類似などであるが、それらは類型論的な特徴で、これをもって系統的な親縁関係を証明する直接の証拠とすることはできない。系統関係の論証にかかわってくるのは、これらの言語の間に、意味と音形が、一致もしくは類似する語彙が、大量に存在していることと、文法的語彙や接

尾辞の中に、意味と音形が類似しているものが、いくつか見いだされることである。

意味と音形の類似した語彙は、モンゴル語族とチュルク語族との間で、また、モンゴル語族と満州・ツングース語族との間で、それぞれ数百に及ぶが、他方、チュルク語族と満州・ツングース語族との間では、わずかしかない。このように、アルタイ学説の論証に希望をもつ立場からすれば、モンゴル語族は、他の2語族の仲介として、3つの語族を「アルタイ語族」に結びつける重要な位置を占めていることになる。

しかし、問題は、モンゴル語族と他の2語族との間に、意味と音形が類似している語彙が大量に存在するにもかかわらず、その一方で、身体語彙、親族語彙、天体や自然現象を表わす語彙、数詞、後置詞、よく使われる動詞や形容詞などの基礎語彙の中に、同様の類似を示す語彙が少ないことである(〈表〉を参照)。

〈表〉 モンゴル文語、古代チュルク語、満州文語の基本的な語彙の比較

	モンゴル文語	古代チュルク語	満州文語
「頭」	terigiün	baş	užu
「目」	nidün	köz	yasa
「父」	ečige	ata	ama
「母」	eke	ana	eniye
「太陽」	naran	kün	šun
「星」	odun	yulduz	usiha
「風」	kei	yel	edun
「雪」	časun	qar	nimanggi
「1」	nigen	bir	emke
「2」	qoyar	iki	juwe
「3」	γurban	üč	ilan
「見る」	üje-	kör-	tuwa-
「聞く」	sonos-	ešit-	donji-
「大きい」	yeke	uluγ	amba
「小さい」	üčügen	kičig	ažige

基礎語彙を比較した場合に、音形の類似したものが、わずかしかないという事実(「アルタイ諸言語」の項の「基数詞対照表」も参照されたい)は、大量の「語彙の類似」の性格について、根本的な反省を促さずにはおかない。モンゴル語族と他の2語族との多くの語彙における類似の程度は、意味もほとんど合致し、対応する音も、大部分が完全に一致し、一部がきわめて類似しているという緊密なものであるが、もしも、それが両言語の系統的な親縁関係によるものだとしたら、その一方で、多くの基礎語彙で、大幅な意味のずれが生じていたり、特別な操作を加えることによってしか証明されない「個別的な音変化」が生じたりしたと考えることは、言語史研究の経験則に反するからである。

同様に、若干の文法的語彙や接尾辞の類似が、系統関係によるものだと仮定すると、それでは、なぜ、それ以外の多くの文法的語彙や接尾辞に、同様な類似がないのかという説明に窮することになる。

アルタイ諸語の系統論研究において、基礎語彙をしかるべき位置に据えて考えるならば、これらの言語が同一の祖語に由来すると仮定しても、その分岐は、きわめて遠い過去のこととなり、著しい語彙の類似は、むしろ言語接触によって、祖語の分岐よりはるかに新しい時代に生じた現象と見なさざるをえない。

【辞書】 現代のモンゴル諸言語の辞書については、それぞれの言語の項目によることとして、ここでは、モンゴル文語の主要な辞書をあげる。

Kowalewski, J. E. (1844-49), *Dictionnaire mongol-russe-français* (Kazan)——モンゴル文語辞典の記念碑的労作で、出版後1世紀半をへた今日でも、その価値を失っていない。

陸軍省編纂(1933),『蒙古語大辞典』(東京;復刻版1971,国書刊行会)——「蒙和之部」と「和蒙之部」からなる。「蒙和之部」は、日本語で引ける最大のモンゴル文語辞典。

Lessing, F. D. (1960), *Mongolian-English Dictionary* (2nd. ed. 1982, The Mongolia Society, Bloomington, Indiana)——訳語が適切で、収録語数、用例も豊富。付録として、ロシア字正書法による索引、読み方があいまいな語の索引、仏教用語集が付されている。入門者、研究者必携。

内蒙古大学蒙古語文研究室(1976),『蒙漢辞典』(内蒙古人民出版社,呼和浩特)——現在、内蒙古で用いられているモンゴル文語の辞典。主見出しと副見出し(熟語)を含めて、約5万語を収録。付録として、モンゴル語文法、難読語の発音等を付す。

孫竹 主編(1990),『蒙古語族語言詞典』(青海人民出版社,西寧)——約3千の語彙について、内蒙古の11の調査地点の方言形,ダグル語,シラ・ユグル語,モンゴル語,ダウンシャン語,バオアン語の語形,および、ロシア字正書法の文章語形を一覧表にまとめた、対照辞典。

【参考文献】

1) モンゴル諸語の概説

服部四郎(1939),「蒙古語」『アジア問題講座 第8巻(民族・歴史篇 二)』(創元社;服部四郎論文集『アルタイ諸言語の研究I』,三省堂,東京,1986に収録)

——(1943),「蒙古語概説」『蒙古とその言語』(湯川弘文社,大阪;服部四郎論文集『アルタイ諸言語の研究II』,三省堂,1987に収録)

*Mongolistik* (Handbuch der Orientalistik, I.



- Abt., V. Band, II. Abschnitt, E. J. Brill, Leiden/Köln, 1964)
- Мөөмөө, С., Ю. Мөнх-Амгалан (1984), *Орчин үеийн монгол хэл, аялгуу* (Шинжлэх Ухааны Академийн Хэвлэх үйлдвэр, Улаанбаатар)
- Надмид, Ж. (1967), *Монгол хэл түүний бичгийн түүхэн хөгжлийн товч тойм* (Шинжлэх Ухааны Академийн Хэвлэх үйлдвэр, Улаанбаатар)
- 野村正良 (1955), 「蒙古語」『世界言語概説 (下)』(研究社, 東京)
- 小沢重男 (1971), 「蒙古語の歴史と系統」, 服部四郎編『言語の系統と歴史』(岩波書店, 東京; 小沢重男『中世蒙古語諸形態の研究』, 開明書院, 東京, 1979に収録)
- Poppe, N. (1965), *Introduction to Altaic Linguistics* (Otto Harrassowitz, Wiesbaden)
- Санжеев, Г. Д. (1953), *Сравнительная грамматика монгольских языков*, т. I (Москва)
- Владимирцов, Б. Я. (1929), *Сравнительная грамматика монгольского письменного языка и халхаского наречия. Введение и фонетика* (Ленинградский восточный институт имени А. С. Енукидзе, Ленинград)
- Weiers, M. (1986), "Zur Herausbildung und Entwicklung mongolischer Sprachen. Ein Überblick", *Die Mongolen: Beiträge zu ihrer Geschichte und Kultur* (Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt)
- 2) Монгол諸言語, 諸方言の分類
- Doerfer, G. (1964), "Klassifikation und Verbreitung der mongolischen Sprachen", *Handbuch der Orientalistik*, I. Abt., V. Band, II. Abschnitt: *Mongolistik* (E. J. Brill, Leiden/Köln)
- Лувсанвандан, Ш. (1959), *Монгол хэл аялгууны учир* (Studia Mongolica, Tomus 1, Fasciculus 32, Улаанбаатар)
- 内蒙古大学中国語言文学系蒙語教研室編 (1964), 『現代蒙古語(上・下)』(内蒙古人民出版社, 呼和浩特)
- Poppe, N. (1955, 1987<sup>2</sup>), *Introduction to Mongolian Comparative Studies* (Mémoires de la Société Finno-ougrienne 110, Helsinki)
- Руднев, А. (1908), "Опыт классификации монголов по наречиям", Г. И. Рамстедт, *Сравнительная фонетика монгольского письменного языка и халхаско-ургинского говора* (Типография Императорской Академии наук, Санкт-Петербург)
- бур)
- Санжеев, Г. Д. (1953), *ibid.*
- Владимирцов, Б. Я. (1929), *ibid.*
- Weiers, M. (1986), *ibid.*
- 喻世長 (1983), 『論蒙古語族的形成和發展』(民族出版社, 北京)
- 3) Монгол語の史的・比較研究
- Poppe, N. (1955), *ibid.*
- Санжеев, Г. Д. (1953), *ibid.*
- (1963), *Сравнительная грамматика монгольских языков. Глагол* (Издательство восточной литературы, Москва)
- 喻世長 (1983), *ibid.*
- 4) 文字論, 文字史一般
- 包祥 (1984), 『蒙古文字学』(内蒙古教育出版社, 呼和浩特)
- 鮑・包力高 (1983), 『蒙古文字簡史』(内蒙古人民出版社, 呼和浩特)
- Санжеев, Г. Д. (1977), *Лингвистическое введение в изучение истории письменности монгольских народов* (Бурятское книжное издательство, Улан-Удэ)
- Владимирцов, Б. Я. (1929), *ibid.*
- Шагдарсүрэн, Ц. (1981), *Монгол үсэг зүй. Тэргүүн дэвтэр. Эрт үеэс 1921 он хүртэл* (Шинжлэх Ухааны Академийн Хэвлэх үйлдвэр, Улаанбаатар)
- 5) Монгол文語の入門・文法書
- Grønbech, K. and J. R. Krueger (1955, 1976<sup>2</sup>), *An Introduction to Classical (Literary) Mongolian* (Otto Harrassowitz, Wiesbaden)
- Hambis, L. (1946), *Grammaire de la langue mongole écrite (Première partie)* (Adrien-Maisonneuve, Paris)
- Poppe, N. (1954), *Grammar of Written Mongolian* (Otto Harrassowitz, Wiesbaden)
- Ринчен, Б. (1964-67), *Монгол бичгийн хэлний зүй I-IV* (Шинжлэх Ухааны Академийн Хэвлэх үйлдвэр, Улаанбаатар)
- 6) 前古典期モンゴル文語
- Ligeti, L. (1972), *Monuments préclassiques 1 (XIII<sup>e</sup> et XIV<sup>e</sup> siècles)* (Monumenta linguae mongolicae collecta II, Budapest)
- Weiers, M. (1969), *Untersuchungen zu einer historischen Grammatik des präklassischen Schriftmongolisch* (Otto Harrassowitz, Wiesbaden)
- 7) 中世モンゴル語

- 中野美代子 (1971), 『砂漠に埋もれた文字——パспа文字のはなし——』(塙新書 38, 塙書房, 東京)
- 小沢重男 (1984-86), 『元朝秘史全釈(上・中・下)』(風間書房, 東京)
- (1987-89), 『元朝秘史全釈続攷(上・中・下)』(風間書房)
- Poppe, N. (1957), *The Mongolian Monuments in ḥP'ags-pa Script* (Otto Harrassowitz, Wiesbaden)
- Поппе, Н. Н. (1938), *Монгольский словарь Мукаддимат ал-Адаб, Часть I-III* (Издательство Академии наук СССР, Москва/Ленинград)
- 上に掲げた参考文献を補うために、次に、モンゴル語学に関連した文献目録を掲げておく。
- 原山焯 (1978), 「元朝秘史関係文献目録」『日本モンゴル学会会報』第9号(東京)
- 内蒙古大学図書館蒙古学部 (1987), 『蒙古学論文資料索引(1949-1985)』(内蒙古大学出版社, 呼和浩特)
- 日本モンゴル学会 (1973), 『モンゴル研究文献目録(1900-1972)』(東京)
- Poppe, N. (1951), *Khalkha-mongolische Grammatik mit Bibliographie, Sprachproben und Glossar* (Franz Steiner, Wiesbaden)
- Schwarz, H. G. (1978), *Bibliotheca Mongolica, Part I: Works in English, French, German* (Western Washington University, Bellingham)
- Sinor, D. (1963), *Introduction à l'étude de l'Eurasie centrale* (Otto Harrassowitz, Wiesbaden)
- Сумьябаатар, Б. (1972), *Монгол хэл, утга зохиол, аман зохиолын ном зүй, I, Монгол хэл* (Шинжлэх Ухааны Академийн Хэвлэх үйлдвэр, Улаанбаатар)
- Тенишев, Э. Р. и Л. Д. Шагдаров (1988), “О развитии советского монголоведения (языкознания)”, *Проблемы монгольского языкознания* (Наука, Новосибирск)
- 烏蘭察夫, 烏力吉圖 主編(1990), 『蒙古学10年1980-1990』(内蒙古人民出版社, 呼和浩特)
- 【参 照】 アルタイ諸言語, オイラト語, オルドス語, カルムイク語, シラ・ユグル語, シロンゴル・モンゴル語, ダグル語, 東郷(ドンシャン)語, 内蒙古語, 保安(バオアン)語, ブリヤート語, モゴール語, モンゴール語, モンゴル語

(栗林 均)